健康づくりセミナー及び
災害救援ストレス対策研修を実施して

北海道江別市消防団

1　はじめに

江別市は、石狩平野のほぼ中央部に位置し、総面積は187.57平方キロメートルを有しており、地形は南端部の標高93.0メートルが最高で、北東部の標高2.5メートルの湿地帯が最低であり、全般的に平坦な地形を形成しています。日本三大河川の「石狩川」が市の北東部から北西部へと市域を貫流し、各支流河川と合流しています。また、南西部には札幌市と北広島市にまたがり、市域の約10パーセントにあたる道立自然公園野幌森林公園が広がっており、四季折々の変化に富んだ豊かな自然を楽しむことができます。

開拓の歴史としては、明治11年に「江別村」が誕生、その後、各地から屯田兵が入地し、計画的な開拓が進められ大正5年に「江別町」、昭和29年に市制が施行され「江別市」が誕生し、現在に至っております。

農業では、「麦の里えべつ」として、石狩地方でも有数の小麦の産地であります。なかでも収穫量が少なく「幻の小麦」といわれている「ハルユタカ」については、初冬まき栽培とすることで安定した収穫・品質を達成することに成功し、全道生産量の大半が江別産となっています。

産業としては、古くからレンガの産地として知られ、120年以上もの窯業の歴史は市民の生活を支えつつ、文化的にも大きな影響を与えてきました。また、毎年7月には道内の陶芸家や金属・ガラス工芸作家を中心に、「やきもの」にこだわった飲食店など約350店が出店する道内有数のイベント「えべつやきもの市」が開催されています。

えべつやきもの市

２　江別市消防団の紹介

当市の消防団は、明治31年（1898）に公設消防組が設置され、昭和14年（1939）には警防団を発足、昭和22年（1947）に消防団に改組されております。現在は、１本部、８分団の条例定数200名で組織されており、本部には団長１名、副団長３名、女性消防団員23名（部長１名、班長３名、団員19名）で、各分団には分団長８名、副分団長８名、部長８名、班長40名及び団員111名の合計194名で構成されています。

消防団には、ポンプ車６台、小型ポンプ付積載車２台及び小型動力ポンプ８台を配備しています。主な活動としては、年１回の消防団長査閲訓練を行うほか、日ごろから防災活動や災害に備えるために分団ごとに訓練を行い、春、秋、歳末には火災予防広報を行っております。

近年は、職員と共同で希望者宅での「住宅用火災警報器設置支援」や万一、火災等の災害が発生した場合、避難誘導など連携が必要と思われる地域内の小規模福祉施設と「顔の見える関係」を作るなどの取り組みを行っております。

また、女性消防団員を対象に応急手当普及員を養成し、市民や事業所においての応急手当普及活動や、火災予防運動期間中には一人暮らし高齢者宅訪問を行うなど、市民の安心と安全を守るため重要な役割を果たしています。

本年の江別市消防出初め式は、市制施行60周年記念のもと、幼年消防クラブ員の「防火の誓い」や「マーチングバンド演奏」を行い盛大に挙行されました。

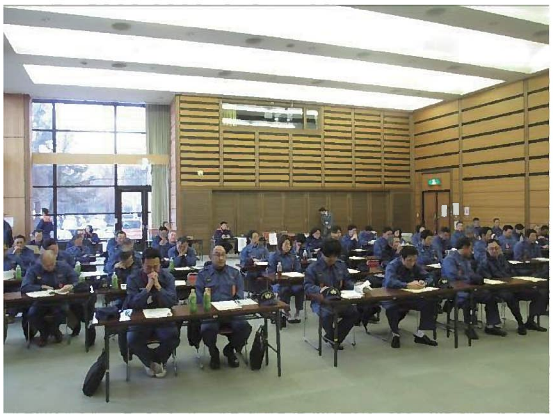
３　「健康づくりセミナー」及び「災害救援ストレス対策研修」を開催した経緯

当市消防団員の平均年齢は48歳で、全国と同様に高齢化が問題となっています。ここ数年において公務災害は発生しておりませんが、消防団員が病気による入院やお亡くなりになることが複数発生しています。

自分自身の体について考え直す機会をつくり、健康に対する意識を変えて同僚への伝達を行い、組織全体の健康に対する意識の改革を期待しています。また、東日本大震災の教訓を今後の消防団活動に生かすために、安全管理セミナーの一環で、惨事ストレス対策関係の研修も併せて実施することにいたしました。

４　「健康づくりセミナー」及び「災害救援ストレス対策研修」を実施して

今回の研修会は、平成26年11月21日（金）に江別市野幌公民館において、当市消防団のほかに近隣の石狩市、当別町及び新篠津村の消防団員にも御参加いただき総勢73名で行われました。



消防団員等公務災害補償等共済基金からの御支援をいただき、「健康づくりセミナー」は、栗山赤十字病院看護師長　小林弘子様を、「災害救援ストレス対策研修」は、消防庁メンタルサポートチームに登録している中村泰江様をそれぞれ講師に迎えて行われました。

受講者からは、「公務災害は、現場活動によるけが等が一般的と思っていたが、疾病によることのほうが多いことを初めて知って驚いた。」「自分の健康を振り返るよい機会になった。」や「通常の生活ではあまり耳にすることのない惨事ストレスについて知ることができた。」「ストレスの対処法にさまざまな方法があることを知り認識が深まった。」などの反響が多く寄せられました。

５　今後の取り組みについて

研修後のアンケート結果から健康や公務災害について多くの団員各個人の意識が非常に高くなったことが感じられました。健康管理に留意しながら地域防災力に従事し公務災害をなくすために、この研修に参加した団員が学んだ知識を生かし、各消防団や分団へ持ち帰り、伝達される体制整備が必要と考えられます。既に行っている独自の新入団員研修会、中級幹部研修会及び幹部研修会において、今回の研修内容の重要性をじゅうぶんに周知し、継続していくことを検討しています。